



本草綱目
三

旅
203
3

218
203
3



春隻秋冬春編卷之三

秋 203

伊勢茂

東都

振鷺亭主人著

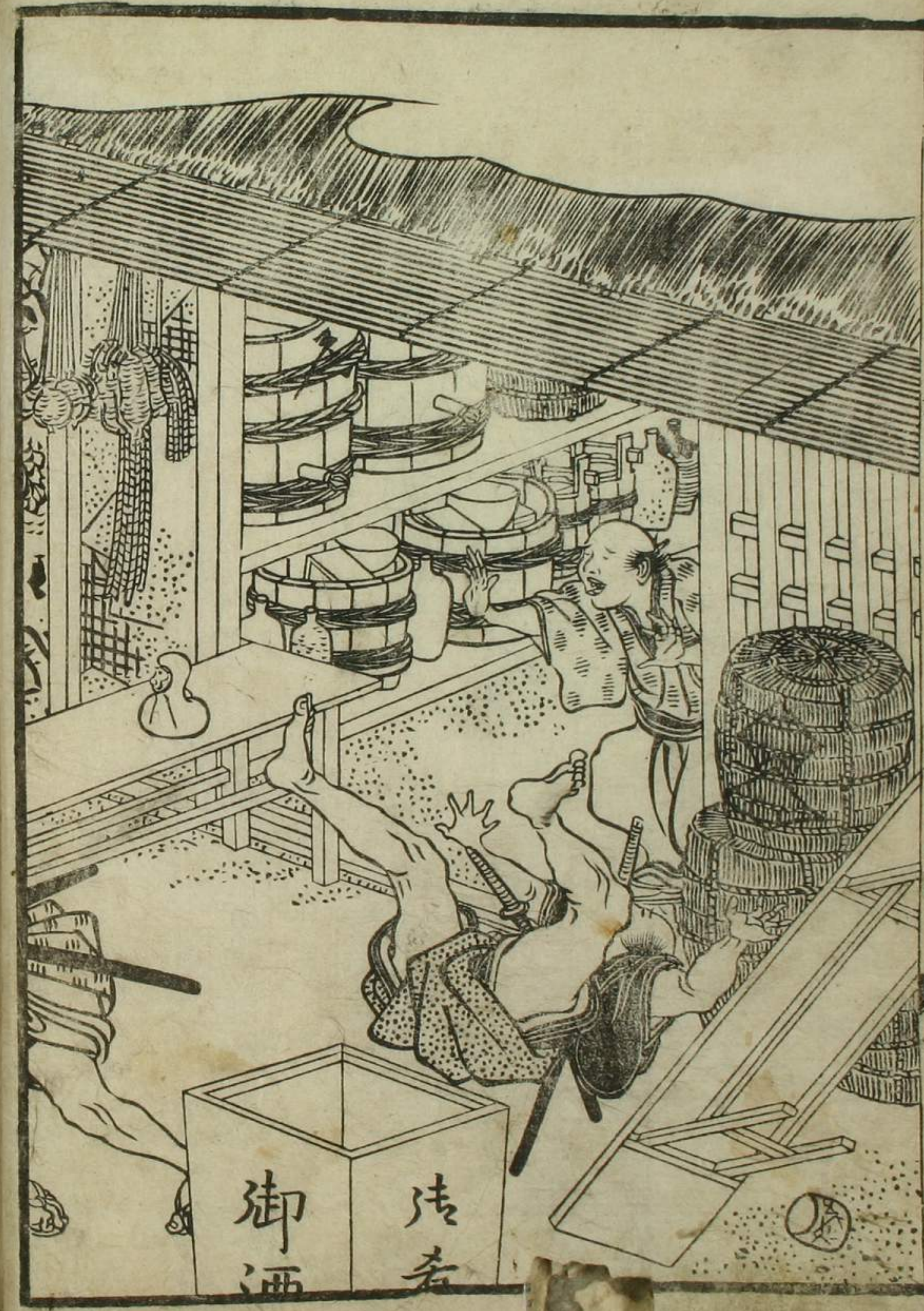
第五齣

美女好男投奔し義を完す
痴人醉漢綽趣し笑成獻也

此附彈二ハ一桶の水を飲つて酒の酔忽ち醒け六六ハひも酔ひて走り出
湯虎のまきまき呼くもるまの客いまだ一樽の酒乃後を興じて何處
を里給や彈二谷て去ける價の樂為二人のおさる其の
廁小大のありとそ是然とあてまふる主の地よは例はわらふ強二を
呼活る小まに胸と心づき忍も張る桐然として絶より事には向て
云るの体大か小おまうく裏の中隠す不承のこころは痛はまに云体

又烏珠遊出さばこそ痛つらん張三と云此を痛しめどもまにが
 我を又いふか痛しう張三と云此はく不達て之你鼻歪く痛ど
 とのへ何事ぞや李にが云你を又烏珠遊出て痛どと云そ乃故い
 張三所々と云小咲て之我元来一眼より一眼ハ咤眼よりて眼
 見世はよと孫練の珠を破く晴と他一たのへ云きて瞶明なるや
 又せはるかよと孫練乃珠一裸集矣うりとも何条惜らんやと能べき
 某亦巴敷よふく執心して瘡を痛らるる法毒眼よ入く逆一
 潰う你沈曼人の沙法すも東もま李に云成けて自を拍て之甚
 妙なり我も又うき舟の君よなれとをて信とを製をまゆかさる
 仕どく瘡毒と云て鼻莖を美ひう某と云乃おのこまごま
 亦中限のお乃とて此の如く折頰と云り好色の乃を此とを
 言すも事なま張三と云さへ你ハ眼鼻てありらうま李にが云そ
 を入眼せしめはるか共又面を向合せて互ま大ひ小笑ひ逆
 又例よりて張三と云多の我你も終あり某有やう眼むらに
 又做造身より強て輕粉劑の劇方を用ひ終より一眼ハ救
 藥毒耳(耳)まで逆る左右の耳腐潰る某你が積よま乃びく
 耳垂珠より造りはてぬ乃とく點耳と云はぬ後よま乃と
 して痛く或ハ瘡しと云おてらうく瘡に幸なげて鼻も割
 せるぬてハ瘡耳用眼睛軌と云て我面相變化の如くま
 びるなり你との鼻を我の鼻と云やその價に酒を買て
 本にが云ま我鼻の鼻缺地是并の御他なりと云も人ハ

散氣を積工て癩痕再點はて天晴眞乃鼻と云も又你か
 言すも事なま張三と云さへ你ハ眼鼻てありらうま李にが云そ
 を入眼せしめはるか共又面を向合せて互ま大ひ小笑ひ逆
 又例よりて張三と云多の我你も終あり某有やう眼むらに
 又做造身より強て輕粉劑の劇方を用ひ終より一眼ハ救
 藥毒耳(耳)まで逆る左右の耳腐潰る某你が積よま乃びく
 耳垂珠より造りはてぬ乃とく點耳と云はぬ後よま乃と
 して痛く或ハ瘡しと云おてらうく瘡に幸なげて鼻も割
 せるぬてハ瘡耳用眼睛軌と云て我面相變化の如くま
 びるなり你との鼻を我の鼻と云やその價に酒を買て
 本にが云ま我鼻の鼻缺地是并の御他なりと云も人ハ



酒をこぼしよのさるおんち你がおんち酒を小盛かさん張三と云成安く大小喜び即ち本に
 を引く酒店此登のよ座やぞ酒をあつらう大勢を以て李曰小酒を勤
 九十餘杯不ど飲のま色のま平ちのま後のま飲のまて去るハ你をのまやのま酒のまと名号て飲のま屏のまつのまと
 さのまるのまをのまとのますのま李曰が云をのま我酒ハのま樽子酒量と名号て飲のま屏のまつのまと
 附ハ能のま且のま以のま又のま熱酒ものま許のま途のまて飲のま附のまハいのまくのまののま又飲のまてのま尚のま大のま丈のま丈のまとのまかのまる
 るのま你のま辞のま返のまさのまるのま又張三又酒をのま盪のまめて李曰小酌をのまとのまてのま飾のまてのま云のま你のまは
 酒をのま流のまりのまとのますのまくのま貨物のまがのま足のますのま日のま是のま買のまさのまるのまハいのまくのまとのま李のま曰のま咳のまてのま云のま你のま而のま飲
 乃のま器のまをのま具のまるのま小のま何のまぞのま推のま直のま車のまののま甲のま死のまあるのま快のま美のまやのま佳のま味のまやのまそのま只のま顧のま子のま飲のま喰のま
 乃のま酒のま店のまの主のまものま向のまてのま又のま何のまののま肉のまものま肴のま小のま出のませのまとのま云のま且のまハのま主のまがのま冬のまハのま牡のま丹のま楓のまの
 美のま大のまなどのま鵜のま南のま山のまいのまとのまものま今のま假のま定のまののま刺のま肉のま軟のまハのま行のまりのまとのますのまとのま以のま者のまものま小のま吏のまののま身のま上のまと
 してのま五分酒をのま米のまるのま小のま心のまるのまばのまてのまわのまりのまぬのま李のま曰のま以のまてのまいのまをのまとのまてのま大のま小のま呪のまをのま罵のまくのま云

你のま我のまをのま侮のまつのま將のまんのま字のまとのま意のま方のま肉のまをのまハのま何のまぞのま外のまののま肴のまをのま持のま来のまとのま云のま附のまハのまこのま乃
 店のまをのま微のま塵のま小のま踏のま冊のまとのまてのま立のま地のま小のま後のま肺のまをのまさのまとのま云のまめんのま生のまをのまはのまてのま李のま曰のま狂のまひのま出のまさん
 索のま成のま恐のま甲のま香のま二三のま隻のま小のま蒜のま泥のまをのま添のまてのま出のまるのま李のま曰のま又のま飽のままでのま吃のまひのま肴のま半のま隻のまとのまお
 してのま禪のま衣のまをのま咄のまとのま刺のまとのまとのま扯のま断のま肴のま成のま包のまてのま懐のま裡のま小のま揣のま入のまとのま遂のまものま坐のまをのまとのまてのままのま云
 事のまハのま我のまハのま今のま急のまののま出のま来のま者のま價のまハのま此のま漢のまるのまようのま横のまべのまとのまてのま是のまをのまとのまとのまてのま跑のま出のまとのま張のま三
 我のまとのま又のま海のまはのまてのま来のまたのまとのまてのまおのまつのまてのま跑のま出のませのまとのま云のま大のま小のま果のまとのまとのまハのま白のま喫のまとのまとのま張のま三
 てのま追のまいのまるのま張のま三のまハのま更のま小のま路のまをのま見のま分のまけのまてのま一のま味のまものま走のまとのまるのま小のま忽のまちのま地のまとのま小のま索のまあ
 成のま踏のまてのま跌のまきのま例のまとのまハのま忽のまちのま傍のまよりのま里のまののま童のま七のま八のまをのま出のま舞のま人のまをのま生のま索のまとのま張のま三
 喚のまやのまぞのま張のま三のまをのま押のまてのま去のまるのまハのま你のま酒のま店のまののま白のま喫のまとのまとのま張のま三のまハのま更のま小のま路のまをのま見のま分のまけのまてのま一のま味のまものま走のまとのまるのま小のま忽のまちのま地のまとのま小のま索のまあ
 ハのま路のまをのま借のまてのま通のまとのま云のまいのま小のま路のまとのま云のまえのまとのま路のまをのま借のまてのまとのま張のま三のまハのま更のま小のま路のまをのま見のま分のまけのまてのま一のま味のまものま走のまとのまるのま小のま忽のまちのま地のまとのま小のま索のまあ
 左右のまののま身のまをのま扯のま張のまけのまぬのまえのまとのま權のま小のま聚のまとのま身のまをのま引のまきのまハのま忽のまちのま言のま成のまがのま良のまとのま左

兆ず射ある身までも己の奴よしと報ふ以奴が鼻を奪ひ取るとんばあぶ
 らずとてひそかにまにが鼻を帯て懐裡小指金ひにばは片の鼻をとり
 うまにが鼻の跡は貼て並ひとまに信て云は身今ハ缺物なまは休よぬと
 ぞとて舌つゝをもち鼻を早めて逃去ぬても又まにハ二更の附分目を見
 してまにをば月先身を照てお鼻のかけよ目よりぬまに酔醒て死
 じが噴出てとまひるの志きりたるお鼻何とと鼻を摸して見ると小
 指は鼻のこころと身ありまに大ひは咳て甚狼狽ておりや奇多哉
 妙なる哉鼻繩と云疾医書にありと聞かとも鼻変て身とらるるの
 和漢いまだ其例とぞ推料する張三が来て彼奴結身と交換世
 とのゝんは血人脱すべきかとて血小指とせおまは死がどく小跑して
 正よ是語小耳を以く鼻貼るといふ類ひかるぬ

第六齣

路に身成朝夷奈乃切通し陥す
 獲之依血を鼻缺地瘞し瀝ぐ
 備と懸る依路江ハ金澤成逸走やとる息をも獲ぞ只小信せと急ぎ
 去るべ九五六里を乘るとおり處小侍の櫛木に青鶴の啼音しる小
 と只見とバ本蔭小一軒の懸所ありて山陰よりつゞ夏夏の水をよつてこま
 冷水野をひいて取るさぬるが最冷き光景なり懸る依是成えて路江に
 向てまらるるをち金沢もまらるる湖く虎にを脱これを見安懐のこひ
 るまじ此處よりハ湖を險阻の山路小ハハ斬り息を獲てまたも
 ちやとて脚ち茶店小を傍て登小腰おちて休むひはばやそ店の上茶
 成と出でる今目ハ暑氣ぬぬと流さばに陰瘴とらぬふき天の氣の
 とちの今とまにが鼻を奪ひ取るとんばあぶらずとてひそかにまにが鼻を帯て懐裡小指金ひにばは片の鼻をとり

七月十日鎌倉まで載せらるる生を安んず今日とて未下討たる處
 此所より鎌倉を越え園まで行役九十里なる其間より險峻なる山路を
 して女鳥の脚を鎌倉までよこす中より今日我宿に泊るるを弘明
 寺とせしめ納め杉本といふ巡礼の同行あるを以て處小泊中せば明日
 同日にてまの冠を祇園に送るは信がまこと我々の用事ありて路を
 急いで申せば是非今日鎌倉まで申すに申すのそとけりけりてわ
 かるる小鹽買人も五人息長も二人乃買人も我々輩八日毎に世傳
 より鹽を運び鎌倉へとて彼來りて者ですは朝夷奈の切通を祇
 る小へかくりて此月小世に流る汗漿を成し身も淋がかくりてやうくは
 雨まで来り小尖岩等今より此處を登りて跡よりこれを鼻缺地と云
 なるのりこれども彼處まで女鳥の脚を大抵日々に申すおよび

七月十日下る小大切通小切通とてすべし十二処の難所ありてある
 鎌倉迄といふおびがこれらその間杉本親吉の門前なる所
 実小一軒の板敷屋をなすは強てまが中にまがひて今宵はまが
 此所も歌で流る路に正成はく心の中甚だ酸いとも又此所も止る
 何とやん怖れくぞ思まき強小言を聞ては我身へ心せまじか
 ぬ旅路かまが少世も早く路をまき申すといひるは二人の買人
 女鳥の脚はいまだ此所を和して後にはびりて朝夷奈の切通と
 申て若より強攻の極かりる所の目も鄙くしてひまも敷腰四買人の
 故地我れを山嶽より出遭いが荷擔の漢子の血漿の者まで區
 擔を以て俵の山賊とてつるものも又五人の等數ともおとひし
 遂にの荷擔の漢子をすこよ切殺せし買人の擔子を捨てわらうの

春集和名

卷之三

春之部



今如氏まで時を暇とて一途分後徒衣ひ来るべき道もこの方共空しく
 くるんじや心成厲して進むとて路にぐるを引籠り處處は遠の後より
 後の人くと噂して一介の漢子進ま来る艶々依方ひひ驚きしてさてこと
 逐人間進く来りてはよのせや進退惟谷なりとて只呆れとてある
 たりるに彼漢子洗ふをく進ま来るを見てあはれは前より息二羽の
 茶店のまより州漢子言をかきてるハ其客路ハ脚軟るはバたこと
 遠くハ公たもままどくおをひて路を急ぎぬ州石まで逐着中しとて
 其客我店の登元の上より紙幣を失脱とまひにあらざとて歸ち
 件の紙幣を盗へる紙幣之依紙幣を受取てとて紙幣に就て云
 さて一紙ある物再びゆるゆるの俵より下の厚情謝する言なり
 か乃志ハ松の葉とやら乞ハ世少るまどもねたまはばとて歸ち二席の紙

紙幣を盗へるハ世漢子固く辞して去るハ僕金銭をむかふ心あらばは
 紙幣を掠て何ハ下まで持来んや其客茶の茶店ハ其客ハ
 我ある一時の得意より別ハ金銭を受取らんやとて竟小受むと別
 を着意た又乞の路はまろろハ紙幣之依其甚茶店のまろ志をかんで
 山麓の人ハ貨物持る車よと嘆き直ハ路にを又逐人ハ捕らるるよと心ひ
 林ハ胸にぞと一咳を催せまろろハ世勢ひハ進ま登らんとて路にハ脚
 血止薬を貼て足情小力ををちひて踐の厚る程やうく到下小せらるね
 茲ハ海道傍乃岩尾に大ひる地を刻齧てあり別自缺地蔵と
 中ハ乞ろり此所たむろろ平多壠るは路にこそ成りて驚き程は
 つやう路もこの岩系心く籠て火のむろろ我身をや今ハ一歩自登びは
 瘡ハ登りて頭暈たきりふとバたたてふ石よすくひ程んや驚き程は

我をも又突熱勢が如く口中吐濁は堪兼る二頭の石滴あふ唇を濡
 ぼとそ那ち岩間の凹とあゆみ水の痛成多し揃ひて二人の濁を漬貝
 傍の本乃根は踏て暫く扇を搦てまきひ居る時と山子親志きや小
 啼く只岩淺水の音寂莫く松嵐指は御考のまかり浩く一處は
 遙の下よと一今の馬士二匹のまよ一今の膳子双兼せて牽来る孰も那
 馬峠のよま進み至る成貝に彼膳子ハ頭よ振揺のまき宿痛あり
 て向勢おめ志まかりまが麻の袴を穿二信を脊肩より多し枕乃
 系成推乃て尻端を拂つ鞍壺よりまき小お兼る音を低く膳子
 来つる双は那の岩簾小跳き足踏み蹴物へ忽ち彼膳子ハ
 鞆壺より滑り墮て地よま勢とお坐ぬ馬士を此大ひに罵てま
 おの且瘦畜生の大きなる殊喰の穢らるとて策をりてまき小馬成

おる双彼膳子馬士をまきめて之やう休るをまき兼る事なまきこ乃る極
 熱れ暑氣小おめまきと勢よ指まき勢まき成ひぬ棄れおくと死ハ
 膳子内羅とまきと孫悔がいとま突悪の馬信より跳まきまき
 とまきまきと膳子小兼ぬありて落るはまき得せずまき成
 落るとまきや中元我馬師皇が真義を極て仙樂の妙をぬまき
 今成るの療治てま地よと乃勅を見まきとてやまき三頭の鐵を出
 して那る乃眼の旋み刺まき忽ち馬ハ身鐵をまき嘶まき馬士
 目を拍てま我まき小活薬師の乃まきつらせ給まきやあまきつら
 とうまきやと伏降くまきまき膳子まきまきはまき柴引の針といま
 りのまきとそ人もまき小兼をまきまき膳子依ハ傍まきまきまき
 彼膳子小向て向てのま先生ハ体ハ馬療の名人まきまきまきまき



して休や空そらも休とも見へどびくの西湖瀟湘乃風来直下は彷彿
 たる如に勝地あり我々は終業を固く看るのありとされども各々解て
 おもひ交知より吾人居なごして名所を知るものなる歎きよとやとまじくと
 語らり起し依直を穿て笑を包て去るハ旅ハ果下のまじ心乃からき
 遊人と同付たごハ路の旁をも忘る高鼻心と何あるべき其ハ火を
 の様なまじとやとまじと申さんて就小火を止とるをの膳子又止て去るハ
 炎客志とくまづ此處より目を待て暑氣を避たま熱く依ごのふ
 炎雨ハ馬もま寄せぬハ後々とびぬは体もすじき風も待くもり流る
 我々ハ女児の軟脚を付ひたごはたや日困ぬうちふまじと申さん結は
 比間ハ山城ありて物念のほ下の茶店まで流るもじぬ彼膳子は受て
 仰々と大ハ小咲て去るハとまじと申さん大ハひる空言なりとの茶店の

ばこの
 未煙等
 との
 例
 の
 例
 の
 例

主こそふくき奴ら各々成切ておのまじとて免て寓斜を一所ぬ
 せんがぬる何茶店心と事ありやのまじとてたきけまづ烟草を喫は
 とく飲く火事裏より火鎖鎖火燧石を把出火口小切火を踏て倡
 とてすめりまじと依直のをぬけて煙火を煙管より受く一道の烟を
 吹をこむの膳子喫して去る我らハ朝之都と申て去るるはく二法
 妙なるまじとて煙草の真の一曲うひく舞の中さんとやぞ脊負
 三法をとめて個子ならぬは喫る煙て鄙唱をど詠る其喫よのやう

相思惟一葉
 自買為君寢
 縦曰直千金
 可憐不斷心

此時起る依路にハ烟草を喫はたの心をなく向をえるは九折の路
 を繞のぐる截岸の雨は太ひる松あり松乃其陰は人影影とく只顧

こゝに我窺ひ望みは路にこそをて指てさるるハ何きこのな彼處人
 一のゆく事二我々をるの必定盜賊さるるは給ふやと怖あるふみま
 大ひは危きて尚と初聲を望み居る處小邊に白乃方より一個の漢子
 赤條々まで面色土のどく喘氣叫して跑来りるが曰人乃亦も速く至
 り進み兼て相拒り勢も依は光景を看て去るは切通の上より白登
 りを賊あつて旅客を初めと聞及べば我々も我々もさるるぞと曾て殺
 けは故も恐はばて此路をさるる你我々が夜裳を剥んとさるるやんか乃漢子
 是が何ぞ叫やばはえて再生さる心地やぬといひて大息を吻と継り勢も依
 卅聲をたて又問てさるるハ你立住て何也我々を怖やの漢子かいつやう
 我ハ賊あつて初て各と我賊かると疑ひ大は怖中ハ我々も依がいつ
 何ハ赤條々までまづは此の處より来るやんかの漢子ハ我々も息も

勢振ひてさるるハ其ハ本房別の人里貝家の士もが強故あつて流浪し今
 録倉小至て遊さんと欲し我々も此路をさるる所小一里さるる後の大樟の茂る
 一も九十人さるるハ山賊等は丸圍まて後代恩顧乃弟後等二人我々
 討死をぬせらば其叶さるるをひてまると計策を出し衣腹刀を投出し
 毎二毎二は隠る賊等の逐は後を逐来りるはうごも武士さるるべきをの此の
 とく赤條々まで命が限りふは不と逃のひ来にあり各々を猶豫さるる
 におもさるる往きさるるハ毎用みりて疾下の方まで給て又後をもえど
 していつらんより乃方よまきまらるる路に幾も依は大ひは驚きさるるハ
 せんとい根根周章さるるハ彼馬士傷の本の枝を折てち執りてて云
 皆些しと怖さるるはあつてさるるは此一本の策を以て攻盜等も往來の
 妨をさるるハ教して通中さるる最場と競ひ進むハ彼勝も大ひま



馬の立向く杖を引勒て去潔き言わぬ我を又びるごらの杖ごまの六絨
 等を購撞小お例に後不を執ん東の明者よる最速女福のまの杖
 るよふまのせを路を急がせさんいご疾々を路にがな成撮るとはご忽
 棄と抱て押例共彼馬士との海馬の雲成とて路にがはふ衝ませ又
 馬の冒索を食て洋より懸る依は危成て大ひは該死屍落ふ合とお坐
 けふ志や曲者といさんると既ぬ刃搦て執るとる所を被る士撲地と
 踏る懸る依踏らして横例よけする所は只を改踏の事大ひぬ呼て云
 るふ我ハ世海道の馬士といども実ハ是放響馬の御守を我
 堂乃謀よ申よりとて吟々とお後路にの懸る依が脚中ぬ踏るお
 見る小必ちく杖んをのをと懸るよ身をあせりさ世時かの膳子双睛
 突兀して看をききとて取ては御守の三懸む事なまをとも脇に

我ハ是吉月人と見せて風々を遍歴ると知勇杖箱の強は血あり今你等
 小烟草を喫らるえよの我謀り今際なる鑽燧の石ハ直虫煙より
 渡る所の大毒石ありは懸る石を以一枝煙州の烟を腹とる者ハ暫時の内
 五毒丸五膳小巡りて四足麻本て身を動くをありご又支地ハ啞と成
 るたやくとの初をいせんもといまごらるらる小彼る士只一脚小小騰と
 賜鹿六懸る依一声嘯鳴と叫てはより絶血滾々と海に七懸八例と
 苦もよ後らうみの懸るは先景成て心地よ多小思嘆て暗圖の笛成
 鳴るが忽ちつ合は御考くとの音とむとく何処あり、以氣のの赤信の
 漢子をばは射狼のとき部賊は八九人をしくとあるは是はかちら御守
 なるきりも馬よ昇のせ懸る衆一隊月よはと造化好と叫んるをき
 るを這て経路の方へ引入るは射懸る依ハ志のよらひせめをせと

叫よたんとするにつら世よをあひらむを總すて五ご體たいのまはらへて二に寸すんも紀ぞ偏は本體
 乃などくまじに實はちぢぢ次じをとり終を鉤に鑿を切て居らるへん
 着きて強は血どもはんぢぢをまきせて山深ふかく日入ひる熱裁さ路ぢの毛
 る上は郷らまて身も動まど泣な叫こもあらわくて唯ただ頭あたまを回らせば整はし依
 高たかととあらじ延はお例たとわる路ぢに丹々ままらのをまる儘ままは先は整はし依
 何なにともんとのいくもあらはり血ちなままらて紅は染ぬ世に次ままをまるの
 小こままらひて其あらじ幽は沈てまど路にあらわくていく程ほどをや
 整と依よがあらじちちのいくも後のいくの影ままらんとと路ぢをまらて
 己おのらは時ときの所は前の路間ままらる一道の山山深ふかく日入ひる熱裁さ路ぢの毛
 かく整はし依よがあらじ状じやうを蓋ひ暗々朦朧とて逐まるの去向かたをまらしめる
 春はる其この秋又またと卷之の三三畢畢

本本要要

